The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Twitterにおける傷つきの社会的構築 : コントロール可能なものとしての傷つき
Author(s)	中川, 佳保
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 61-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Twitter における傷つきの社会的構築
―コントロール可能なものとしての傷つき―

中川佳保

1. はじめに

近年、日本社会において、自分や相手を傷つけないようにすることが一つの潮流をなしている。例えば、1990 年代には、大平（1995）が、『やさしさの精神病理』の中で、相手を傷つけないために相手に踏み込まないようにするという新たな「やさしさ」が青年の間に生まれていることを報告している。また、2000 年代にも、土井（2008）が、ケータイやメールを駆使しながら、自分や他人を傷つけないように希薄な人間関係を構築する青年たちの姿を描き出している。また、青年に限らず、和田（2004）や信田（2013）のように、自分のことを傷つきやすいと考えている人や傷ついた経験を持つ人に向けて、その対処法などを助言するような一般向けの著作も発行されている。

もちろん、傷つきやすさには個人差がある。しかしながら、昨今は、傷つきにくいと自認している人にとっても、相手を傷つけないよう配慮することが問題となる社会になっている。その証左となる現象として、トラウマの判断基準が患者の主観に依拠するようになってきていることや（Lukianoff & Haidt 2018: 26）、ハラスメントの定義が「他者に対する発言・行動等が本人の意図には関係なく、相手を不快にさせたり、尊厳を傷つけたり、不利益を与えたり、脅威を与えること」[1]（下線は発表者による）のように傷つける側の意図に関わらず認定されるものになっていること、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）において誹謗中傷の対策や取り締まりの強化が進められていることなどが挙げられる。

では、このように忌避される傷つきというのは、社会的にどのような意味をもつものなのだろうか。本稿では、言語使用を通じて社会的に構築されるものとして傷つきを捉え、コミュニケーションの中で傷つきがどのようなものとして構築されているのかを明らかにする。具体的には、「傷つく」という言葉が使われている Twitter の投稿（ツイート）を言語人類学の枠組みを用いて分析することで、その一端に迫る。

2. 理論的枠組み

先述の通り、本稿では言語人類学の枠組みに依拠して分析を進める。特に、コンテクスト化とテクスト化、詩的機能、フッティングという三つの概念を援用してアプローチする。

2.1 コンテクスト化とテクスト化

まず、コンテクスト化とテクスト化（小山 2008; 榎本 2019）について説明する。これは、ある言語使用が、それを取り巻くコンテクストを指標するあるいは指し示すこと（コンテク

[1]https://www.omp.ac.jp/harassment/about.html　2022/05/04 最終アクセス

スト化）を通じて、そのコンテクストとの関連性のなかで、社会文化的に意味をもつテクストとして認識可能になる（テクスト化）、というプロセスを概念化したものである。指し示されうるコンテクストには、例えば、それまでの発話や過去に起きたコミュニケーション、参与者、参与者間の関係、コミュニケーションの目的、媒体、場面、制度、社会的な規範、社会的に共有された考え方や価値観、知識などがあるが、理論上はあらゆるものがコンテクスト化されうる。

また、コンテクストの指標には、前提的な指標と創出的な指標という二つがある（Silverstein 1976）。前提的な指標とは、ある言語使用をその状況において適切なものとするようなコンテクストの指標のことである。また、創出的な指標とは、ある言語使用によって明示化されたり（made explicit）つくりだされたり（made to exist）するコンテクストの指標のことである。例えば、食卓で塩をとって欲しいときに言う「それとって」という言語使用は、「それ」が指示する塩がなければ、解釈が困難なものとなる。このような場合に、食卓に塩があるという状況が前提的なコンテクストとして指標され、また、そのコンテクストが指標されることで、「それとって」が「塩をとってほしい」と要求する発話として認識可能なテクストとなる。また、普段はタメロで話している友人にお金を借りるときに「お金を貸してくれませんか」と敬語を使用することは、その時に友人との間に社会的な距離があるというコンテクストを創出的に指標する。また、ある言語使用によって創出的に指標されたコンテクストが、次の言語使用において前提的に指標されるというふうに、コンテクスト（の指標）は動的にコミュニケーションに関与している。

コンテクスト化とテクスト化に着目することで、「傷つく」の使用にともなってどのようなコンテクストが指標されるのか、すなわち、どのようなものが傷つきに関連のあるものとしてコミュニケーションに関与するのかをみることが可能になる。

2.2 詩的機能

詩的機能とは、Jakobson（1960）が提唱した六機能モデルに含まれるものである。Jakobsonは、コミュニケーション出来事の構成要素としてメッセージ、メッセージの送り手、メッセージの受け手、メッセージが伝達されるための経路、メッセージの言及対象、メッセージが解釈されるコードという六つを措定し、メッセージにはそれぞれの要素を志向した機能があるとした。詩的機能は、六つの要素のうちメッセージそのものを志向した機能で、「等価の原理を選択の軸から結合の軸に投影するもの」（ibid.: 358）、つまり、同一の（すなわち「等価」の）形式の反復を可能にするものである。詩的機能に関して重要なのは、類似した形式の反復によって、その形式が一つのテクストとして解釈可能になったり、その反復が生起する出来事が一つのまとまりあるいは結束性のあるものとして解釈可能になったりすることである。詩的機能が顕著に役割を果たすのは、韻文やだじゃれであるが、日常的、散文的なコミュニケーションにも、また、言語形式だけでなく、儀式のような相互行為の次元にも、詩的機能はみられる（Silverstein 1985; 榎本 2019）。また、詩的機能が作用する反復構造は、

その相互行為の参加者にはあまり明瞭には意識化されないという特徴がある（小山 2011）。

本稿では、詩的機能という概念を用いて、ツイートに見られる反復を同定し、その反復によって何が生み出されているのか、どのように結束性が生み出されているのかを明らかにする。

2.3 フッティング

フッティングとは、Goffman（1981）が提唱した概念であるが、一言でいうと、相互行為の中で構築され、また相互行為を通じて変容する、参与者たちの関係を指すものである。Goffman（1981: 128）にもとづいて詳しく説明すると、参与者間の関係は、声の高さ（pitch）や大きさ（volume）、リズム（rhythm）、強調の置き方（stress）、トーン（tonal quality）の変化やコードスイッチ、スタンスの変化などによって変化する。また、重要な点として、「フッティングの変化は出来事に対するフレームの変化について話す別の方法である（“A change in footing is another way of talking about a change in our frame for events.”）」（前掲書: 128: 筆者訳）、つまり、フッティングという概念によって問題化される参与者間の関係は、なんらかのフレームにおける関係であるということを確認しておきたい。

本稿においては、フッティングの概念を用いることによって、ツイートを通して参与者間にどのような関係づけ（の変化）が起きているのかに着目する。

3. データ

本稿で分析するのは、日本で展開されている SNS の一つである Twitter から収集した投稿である。Twitter とは、本名や匿名でアカウントを作成し、他のアカウントをフォローしてそのアカウントの投稿を閲覧したり、自身で投稿を発信したりすることのできるサービスで、特に、一つの投稿に 140 字までという制限が設けられている点を特徴としている。また、Twitter には、①日本で最も多く利用されている SNS である[2]、②例えば東日本大震災に関連する怒りや不安といったネガティブ情動を Twitter を通じて社会的に共有するというように（三浦ら 2019）、ネガティブな情動を表出する場としての機能を有している、③「いいね」機能によって、ある投稿に対してどの程度のユーザーが共感・関心を抱いているのかが可視化される、といった特徴があり、この点において本研究に適切であると判断される。

本研究ではまず、Twitter 上の検索機能を用いて、「傷つく」（あるいは「傷付く」、「きずつく」）を含み、2020 年 1 月 1 日から同年 12 月 31 日の間に投稿され、1000 以上の「いいね」がつけられたツイートおよびそれにツリー機能を用いてつなげられたツイートを収集した。Twitter 社のヘルプセンターによると、「いいね」は、「ツイートに対する好意的な気持ちを示

[2] Twitter の月間利用者数は 2017 年時点で 4500 万人以上であった。以後 Twitter からの公表はされていないものの、2019 年時点で Facebook の月間利用者数は 2600 万人、インスタグラムの利用者数は 3300 万人であったため、現在でも Twitter は国内で最も利用されている、あるいはそのようなサービスの一つであると考えられる。

すために」使われるものである[3]。また、荻上チキと高史明が行ったアンケート調査[4]によると、ユーザーが「いいね」をするのは、投稿を面白いと思ったとき（62.7%）、投稿に共感したとき（55.9%）、投稿を重要な情報だと思ったとき（43.3%）、投稿を後から読み返したいとき（22.6%）である。後の二つの場合には、必ずしも、「いいね」した投稿に対してユーザーが好意的あるいは肯定的な気持ちを持っているとは限らないが、少なくともユーザーがその投稿になんらかの関心を寄せているとはいえるであろう。したがって、1000 以上の「いいね」を得た投稿というのは、ある程度広く、社会的に、肯定的な感情や関心を集めたものであり、そのようなツイートを分析することは本稿の目的に適していると考えられる。

収集されたツイートの中で頻繁に見られたパターンの一つに、傷つかないための方法や、傷ついたときの対処法に関して投稿するというものがあった。本稿では、そのうち特に多くの「いいね」を集めたツイートを分析する。

4. 分析

本稿で分析するのは以下のツイート[5]である。2020 年 11 月 29 日 18 時 28 分に投稿され、2,680 件のリツイート、255 件の引用リツイート、15,677 件のいいねを獲得している。

他人の発言で傷付きやすい人はこの５つ意識してみて

①誹謗中傷する奴なんて不幸な暇人だけ。同情してやるぐらいで丁度いい
②批判と人格否定は違うので傷つく必要なし
③批判の大半は嫉妬。君が成功してる証拠だ。喜べ
④他人は好き勝手言う。いちいち反応してたらキリがない
⑤気にするだけ損。寝ろ

4.1　他人の発言で傷つくという出来事の立ち上げとそれに対する認識の仕方の提示

このツイートではまず、「他人の発言で傷付きやすい人は……してみて」と、「他人の発言で傷付きやすい人」に対する呼びかけ（address）をするような形をとることによって、ツイートの読み手を「他人の発言で傷付きやすい人」として措定し、続く部分を宛てている相手はそのような人であるというコンテクストを立ち上げている。また、「他人の発言で傷付きやすい人」という表現においては、他人の発言で傷つくという出来事が前提的に指標されている。

さらに、続く①から⑤をみると、各箇所の冒頭で、他人の発言で傷つくという出来事を構成する諸要素への言及がなされている。具体的には、①では「誹謗中傷」という人を傷つけ

[3] https://help.twitter.com/ja/using-twitter/liking-tweets-and-moments　2022/05/04 最終アクセス
[4] https://www.buzzfeed.com/jp/kensukeseya/iine-twitter-1　2022/05/04 最終アクセス
[5] https://twitter.com/badassceo/status/1332979653410131968 2021/11/23 最終アクセス

る行為、そして「誹謗中傷する奴」という傷つける側が、②と③では「批判」という人を傷つける行為が、④では「他人」という傷つける側が、⑤では「気にする」という傷ついた側の反応が言及されている。こうした言及の繰り返しを通じて、ツイートの最初の一文で前提的に指標されていた他人の発言で傷つくという出来事が、これらの要素から成るものとして形づくられていっている。

①から⑤それぞれの全体を見てみると、まず、以下のあみかけ部分において、他人の発言によって傷つくという出来事を成す諸要素に対する認識の仕方が提示されている。

①誹謗中傷する奴なんて不幸な暇人だけ。同情してやるぐらいで丁度いい
②批判と人格否定は違うので傷つく必要なし
③批判の大半は嫉妬。君が成功してる証拠だ。喜べ
④他人は好き勝手言う。いちいち反応してたらキリがない
⑤気にするだけ損。寝ろ

①と④では、それぞれ「誹謗中傷する奴」および「他人」というふうに、他人の発言によって傷つくという出来事の中の傷つける側について、「不幸な暇人」「好き勝手言う」という位置づけを行っている。ここでは、「奴」「不幸」「暇人」「好き勝手言う」といった表現によって、傷つける側が低い位置に置かれている。さらに、続く「同情してやるぐらいで丁度いい」、「いちいち反応してたらキリがない」という部分では、「～してやる」、「いちいち」と言うことによって、傷つく側が傷つける側よりも優位にあるというコンテクストが創出されている。また、②と③では、「批判」という傷つける側の行為について述べているが、まず②では、「人格否定とは違う」として、人格否定と批判が区別されるべきものであるという認識が示されている。つづく「傷つく必要なし」という部分とあわせて考えると、人格否定は傷ついても仕方がないものである一方、批判は傷つく必要のないものであるという違いが、ここでのコンテクストとして前提とされていると考えられる。次の③では、批判は「大半は嫉妬」であり、「成長している証拠」としている。ここでは、②で人格否定と区別された批判の大半を、嫉妬と同一視し、さらに「成長している証拠」と肯定的なものに変容させている[6]。⑤では「気にするだけ損」と、「気にする」という傷つく側の反応が「損」なものと否定的に価値づけられており、①と④の場合と同様、傷つく側が傷つける側よりも上位に置かれている。①から⑤を通して、傷つけた側に対して傷つけられた側を優位に置きながら、他人の発言で傷つくという出来事は気にする必要のない、価値の小さいものであるという認識が創り出されているといえるだろう。

4.2 投稿者からの読み手に対する指南

[6] 「成長している証拠」であることが必ずしも肯定的であるとは限らない可能性もあるが、つづく「喜べ」という部分から、少なくともこのツイートにおいては肯定的なものとされているといえよう。

前節では、①から⑤にかけて、他人の発言で傷つくという出来事そしてそれに対する認識が創出されていくさまを確認したが、このツイートでなされていることは、それだけではない。以下に枠で囲んだ部分をみてみよう。

①誹謗中傷する奴なんて不幸な暇人だけ。同情してやるぐらいで丁度いい
②批判と人格否定は違うので傷つく必要なし
③批判の大半は嫉妬。君が成功してる証拠だ。喜べ
④他人は好き勝手言う。いちいち反応してたらキリがない
⑤気にするだけ損。寝ろ

以上の部分では、まず、他人の発言で傷つくという出来事に対する反応の仕方が示されている。①、③、⑤では、「同情してやるぐらいで丁度いい」、「喜べ」、「寝ろ」、というふうに、どのような行動をとるべきかを述べている。また、②と④では、「傷つく必要なし」、「いちいち反応してたらキリがない」と、「傷つく」、「反応」といった行動を否定することによって、そうした行動をとらないように、消極的な形で反応の仕方を伝えている。

さらに、フッティングに着目すると、この部分では、単に反応の仕方が伝えられているだけではなく、ツイートにおける投稿者と読み手の位置づけも起きていることがわかる。まず、①から⑤における反応の仕方の教示に加えて、③での「喜べ」、⑤での「寝ろ」にみられる命令形の使用によって、投稿者が指南する側で読み手がそれに従う側であるという上下関係が創り出されている。また、この関係を補強するものとして、①から⑤にかけて、③の「してる」と④の「してたら」を除く、ほとんどの部分で、「タ」や「テイル」といった、テンス・アスペクトを示す表現が使われていないという点に注目したい。こうした無時制の使用は、ことわざや格言といった、一般的な真理を表すとされるジャンルにみられるものである。つまり、このツイートにおいても、無時制の使用によって、そこで提示される内容が、より一般的なもの、一般化されたものとして立ち上げられていると考えられる。教示される内容が、特定の誰かにしか適用できない個別具体的なものではなく、一般的なものとされることによって、より、指南というフレームが、そして教える側の投稿者と教えられる側の読み手という関係が強化されているのである。

また、詩的機能という観点からこのツイートをみると、①から⑤にかけて、「数字＋文」という形式や、他人の発言で傷つくという出来事に対する認識の仕方の提示のあとに反応の仕方を教示するという行為が繰り返されており、これによって①から⑤の部分に結束性が与えられている。さらに、先述の無時制の使用に関連して、①から⑤では、ツイートの冒頭の「～してみて」とは対照的に、命令形や「～必要なし」、「～キリがない」といった強い断定の形式を繰り返しており、こうした繰り返しの構造によって、①から⑤の部分で特に「指南」という一貫したフレームが生み出されている。

前節もふまえてこのツイートで起きていることをまとめると、まず、他人の発言で傷つくという出来事が立ち上げられ、①から⑤にかけて、その出来事が具体的に形づくられながら、

それに対する認識の仕方、さらに反応の仕方が、投稿者から読み手に対する指南という枠組みの中で、提示されている、といえるだろう。

5. 考察

5.1 自己啓発メディアとの類似性

上記の分析を踏まえ、本稿で分析したツイートをより広い文脈に位置づけようとすると、自己啓発メディア[7]との関連を見出すことができる。

まず、4.2 でみた投稿者と読み手との上下関係に類似性を見出すことができる。自己啓発メディアにおいては、著者が読者に対して、望ましい生き方や精神のありかた、それを達成するための術を示すというふうに、著者が教える側であり、読者は教わる側であるという関係が前提とされている（もちろん、その内容を読者が批判することも可能ではある）。本稿で分析対象としたツイートにおいても、4.2 の通り、投稿者が読み手に対して行動を指南するという関係が立ち上げられており、この点において自己啓発メディアとの類似性を見出すことが可能である。

また、牧野（2012）は、1990 年代後半以降の自己啓発書ベストセラーについて、「自己の内面という、それ以前のベストセラーでは不可視・不可触であった対象について、具体的に働きかけることができる、変革することができると謳い、そのためのさまざまな技法を人々に発信し、また多くの人々に消費された」と特徴づけ、この特徴を「内面の技術対象化」、すなわち「自己という対象が、…（中略）…定型化された技法・プログラムによってその内面を可視化され、また変革・コントロール可能な対象として位置づけられるようになった」としている（前掲書: 80）。言い換えると、自己の内面をコントロール可能なものとみなし、そのコントロールの方法を伝授するという傾向が自己啓発メディアにはみられるのである。本稿のツイートが扱うのは他人の発言によって傷つくという出来事であるが、このツイートにおいても、他人の発言によって傷つくという出来事に対してとるべき行動、すなわち傷つきをコントロールするための手段が①から⑤にかけて示されており、方法を伝授するという点においても自己啓発メディアと共通している。従って、本稿のツイートにおいても、「傷つき」という「自己の内面」に作用する対象をコントロール可能なものとみなすという傾向が見られるといえるだろう。この点においても、本稿で分析したツイートは自己啓発メディアと類似している。

まとめると、書き手（投稿者）と読み手の間の指南関係、内面をなんらかの方法によってコントロールしようという志向性、そしてその方法の伝授という三点を、本稿で分析したツイートは、自己啓発メディアと共有しているのである。自己啓発的な内容を扱う書籍の発行点数が 1990 年代から増加の一途をたどっている（そうした内容に対する一般的な関心が高

---

[7] ここでは、ベストセラーとなった自己啓発書を分析した牧野（2012: ii, iii）にならい、自己啓発を「『自分自身の認識・変革・資質向上への志向』という意味」で、自己啓発メディアを「自己啓発に関連する内容を扱うメディア全般」という意味で用いる。

まっている）ことが示す通り（前掲書: 33-35）、自己啓発は近年の日本社会において一つのブームとなっているが、本稿のツイートも、そのあらわれとして位置づけることができるだろう。

5.2 傷つきの構築

ここまでの分析および考察を踏まえて、本節では、傷つきがどのようなものとして構築されているのかを改めて考察したい。

まず、本稿で分析対象としたツイートを振り返ってみよう。このツイートでは、他人の発言で傷つくという出来事が前提的に指標されていた。そして、その出来事を構成する要素として、「不幸な暇人」「他人」という傷つける側、「誹謗中傷」「批判」という行為、そして「気にする」という傷ついた側の反応が言及されていた。これらを踏まえると、傷つきというのは、傷つける側と傷つく側という二者が存在し、傷つける側は傷つく側とは異なる他人であり、傷つける側の発言、特に誹謗中傷や批判といった行為によって傷つきが生じ、傷つきに対して気にするという反応が起こる、というようなものであるという像が浮かび上がってくる。このツイートが 1 万以上のいいねを獲得していることを考えると、このような傷つき観は、「他人の発言で傷付きやすい人」ということばによって喚起される、過去に読み手が経験した過去の、あるいは今後起こりうると想定される仮想の傷つき出来事とある程度類似するものであると考えられる。また、先行研究において、批判や中傷が人を傷つけるものであるということ（Vangelisti 1994）、傷つきは他人との間で、言い換えると対人的に起こるということ（Vangelisti 2016）は明らかにされているため、この傷つき観自体に特段の新しさがあるわけではないが、Twitter 利用者という、非学術的専門家が多い集団にとっても、共感や関心が集まりやすい側面を持つという点は、このツイートから確認できるだろう。

次に、前節において自己啓発メディアとの類似性を論じる中で、本稿のツイートにおいては、傷つきをコントロール可能なものとみなし、それに対する方法を伝授するという傾向がみられた。ここではまず、大きな前提として、傷つきというのは対処すべきあるいは対処したい対象であるという姿勢が看取される。また、そのコントロールの仕方に注目すると、傷つく側個人が、「同情する」や「喜ぶ」、「寝る」といった特定の行動をとること、あるいは「気にする」という行動をとらないことによって、傷つきに対処するものとなっている。従って、傷つきというのは、特に、傷つく側個人の行動によって、コントロール可能なものとして構築されているといえよう。

ただし、4.1 の通り、ツイートの①から⑤にかけて、傷つく側の優位性が繰り返し立ち上げられている点を踏まえると、傷つきというのは、そうしないと対処できない程度にはその存在や影響が大きいもの、つまり、もともとは影響が大きいものであるがゆえに、傷つく側の方が優位であるというコンテクストを創出する必要が生じるようなものであると考えられる。従って、単にコントロール可能なものというよりも、その影響の大きさゆえに、コントロール可能なものにしようとされているものであるとも考えられる。

6. 結語

本稿では、傷つきがコミュニケーションを通じてどのようなものとして構築されているかを明らかにすることを目的に、Twitter において「傷つく」を使用したツイートを収集し、言語人類学の観点から、その一つを分析した。当該ツイートにおいては、まず、他人の発言で傷つくという出来事が立ち上げられ、さらに、その出来事が具体的に形づくられながら、それに対する認識の仕方、さらに反応の仕方が、投稿者から読み手に対する指南という枠組みの中で、提示されていた。そこでの傷つきは、傷つける側である他人の誹謗中傷や批判といった行為によって生じるもので、それに対して傷ついた側が気にするという反応をするというようなものであった。また、当該ツイートには自己啓発メディアとの類似性がみられ、傷つきというものが、傷ついた側の個人の行動によってコントロール可能な対処すべき対象として創り出されていた。

本稿で扱いきれなかった問題として、他の文脈においてみられる「個人の力」への依拠との関連性に関する議論が挙げられる。具体的には、2012 年から 2013 年にかけてのスマートフォンの普及にともなう SNS 利用者の増加によって、「個人の力」による発信が可能になったこと、また、自己責任論やいわゆる新自由主義にみられる「個人の力」の重視の傾向といった文脈が、本稿で分析したツイートにみられた、傷つきの対処における「個人の力」への依拠と関連性があるのか、またあるとしたらどのような関連性があるのか、という問題である。こうした、社会を取り巻くよりマクロな文脈との関連を視野に入れながら、また、他の種類のツイートの分析と合わせて、より包括的に、傷つきが社会的にどのようなものとして構築されているのかを引き続き考察したい。

参考文献

Goffman, E. (1981). *Forms of Talk*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.

Jakobson, R. (1960). “Closing statement: Linguistics and poetics.” In T. Sebeok (Ed.), *Style in Language* (pp.350-377). Cambridge: Massachusetts Institute of Technology Press.

Lukianoff, G. & Haidt, J. (2018). *The Coddling of the American Mind: How Good Intentions and Bad Ideas Are Setting Up a Generation for Failure*. UK: Penguin Books.

Silverstein, M. (1976). “Shifters, linguistic categories, and cultural description.” In K. H. Basso and H. A. Selby (Eds.), *Meaning in Anthropology* (pp.11-55). Albuquerque, N. M.: University of New Mexico Press.

Silverstein, M. (1985). “On the pragmatic “poetry” of prose: parallelism, repetition, and cohesive structure in the time course of dyadic conversation.” In D. Schiffrin (Ed.), *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications* (pp.181-199). Washington, DC: Georgetown University Press.

Vangelisti, L. A. (1994). “Messages that hurt.” In W. R. Cupach and B. H. Spitzberg (eds.), *The Dark*

Side of Interpersonal Communication (1st edition), 53-82. New Jersey and London: Lawrence Erlbaum.

Vangelisti, L. A. (2016). “Hurtful communication.” In C. R. Berger and M. E. Roloff (Eds.), *International encyclopedia of interpersonal communication*. New York: Wiley Blackwell.

榎本剛士 (2019). 『学校教育のコミュニケーション論—「教室で英語を学ぶ」ことの教育言語人類学試論』大阪大学出版会.

大平健 (1995). 『やさしさの精神病理』岩波新書.

小山亘 (2008).『記号の系譜—社会記号論系言語人類学の射程』三元社.

小山亘 (2011). 『近代言語イデオロギー論—記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史』三元社.

土井隆義 (2008). 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書.

信田さよ子 (2013). 『傷つく人、傷つける人』集英社.

牧野智和 (2012). 『自己啓発の時代—「自己」の文化社会学的探究』勁草書房.

三浦麻子・小森政嗣・松村真宏・平石界 (2019). 「ソーシャルメディアにおけるネガティブ情動の社会的共有—東日本大震災関連ツイートの長期的変化」エモーションスタディーズ, 4, 26-32.

和田秀樹 (2004). 『自分のことを「傷つきやすい」と感じている人へ—「イヤなこと」が消える 60 の処方』全日出版.